

聖霊降臨後第10主日

「安息日の主」

ルカ6：11-17

(1)

今朝は、主イエスとパリサイ人たちの安息日論争した箇所です。「安息日」とは何か、何時頃定められたのか——、今朝はそのことを中心に目をこめます。

聖書の舞台は、小アジアのパレスチナの地です。そこから遠く離れている東洋の日本に住むわたしたちにとって、「安息日」とは何か、これは、にわかには理解出来るものではありません。少なくとも、明治以前の日本に、聖書が定めているような休日制度はありません。

「週7日」という制度が、国で正式に定められたのは、明治五年です。それまでは、7日に一度の休日を取る習慣などはありません。今週からお盆休みがはじまります。丁稚として働いていた者の休みといえは、月では一日と二五日、そして、一年では、「盆」と「正月」でした。一昔前の日本の軍隊では、「月月火水木金金」と歌われ、土曜も日曜もなく働き、働けといわれました。

日曜日をファースト・デイとした西欧式カレンダーが、日本の社会に定着したのは、何と敗戦後の1945年以降のことです。

出エジプト記20章に、イスラエルの民に「十戒」が与えられ、そこに「安息日」の定めが記されています。「安息日」の語源は、「中

止する」(シャパス)、「聖とせよ」とは、「他の日と区別しなせよ」との意味です。

つまり、「安息日」には、汗水流して働いてきた六日間とは区別して、「なんのわざをもしてはならない日」と定められたのであります。即ち、身も心も完全に休ませて、働くことからの解放と休息の日であります。しかも、それが本人だけではなく、家族も、使用人も異国人も、さらに家畜までも含めて、全てが休息することが命じられています。しかも、守れる時に、守れば良いというでもありません。「安息日」を定められたのは天地を創造なされた主なるお方とすれば、当然厳守しなければなりません。(申命記5：14)。

安息日厳守を「サバタリアニズム」と言われてきました。2000年にわたるキリスト教会において、これは重要な役割を果してきました。

一度目は、9世紀、ローマ帝国を内部から脅かしていたゲルマン民族をキリスト教化する目的のため、もう一度は、宗教改革後の17世紀のピューリタニズムの時代です。宗教改革の原理、「聖書のみ」・「恩寵のみ」・「信仰のみ」をかけたましたが、それが教理だけにとどまらないで、生活全般を改革するまでに及び、週六日の労働と、日曜日の礼拝厳守というライフ・スタイルを確立した時代です。

ところで、日本のプロテスタント宣教は、明治5年以來、すでに150年ほど経ちましたが、安息日を守る伝統が以前にもまして教会

に定着したかと言えば、そうとばかりとは言えませんが。そこには、個人の、家庭の、地域社会特有のさまざまな要因があることは、十の十分知っています。

「安息日を聖とせよ」を、ただ、厳しいとだけ受け止めているとすれば、根本から見つめ直す必要がありません。

「安息日」を定めたお方は、わたしたちの霊肉の健全な回復を願われたお方であることに気づかねばなりません。

19世紀後半、アメリカ「リトルトレッシユ」という時代がありました。金脈を探し当てて一攫千金を狙う探掘者が、幌馬車をわれ先にと走らせて、西へ西へと急ぎました。

ところが、そのなかで、「安息日」ともなると、家族も馬も休ませて西部を目指したもののだちがいたのです。結果は明らかです。「急がば回れ」というではありませんか。

出エジプト19章4節以下を見ますと、御民イスラエルに、「十戒」をお与えになられた真意が記されています。

「あなたがたは、わたしがエジプトにおいてした事と、あなたがたを鷲の翼のせて約束の地にいたらせたことを見たではないか。

もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るならば、あなたがたはすべての民にまさって、わたしの宝となるであろう」と申しております。

わたしの契約を守るならば、あなたがたは、すべての民にまさって、わたしの宝とな

る。「こうまで確かな約束をなされたお方がお与えになったのが十の戒めであります。

文明評論家の一人が、「先生がいなくなった教室のこどもたちのつらさ」あつてはならぬ」と注意をしております。先生不在の教室となれば、生徒は勝手気ままになります。

エペソ5章1節には、「あなたがたは、神に愛されてこゝろをこめて、神に倣うものになりなさい」「エペソ5:1」の勧めをしているのは使徒パウロですが、エペソの教会のキリスト者「自己流の生き方ではなく、神に愛されてこゝろをこめて」安息日を覚えて、聖とする生き方を身につけなさいとの勧めがあります。

(2)

「安息日を覚えて、聖としなさい」との戒めを与えたお方の真意に耳を傾けねばなりません。

「モーセの十戒」は、別名「モーセの契約」ともいわれてきました。「契約」という言葉は、分かりづらい面があります。

東北震災の時、「絆」という言葉が全国的に広がりました。「契約」とは、「愛にもとづく絆」でもあります。地縁・血縁という絆ではなく、主なる神と人間との間に結ばれた「絆」が、「契約」の意味でもあります。

七日目に安息日があることを、「人間的存在」と言われた方がおります。安息日を意識しなければ、日曜日「寝て曜日」となり、のんびんだらりと過ごす「定年退職後の生活」

のようになりませぬ。

「じつが、安息田など意識しないでいたわ
たしたちに、ある時、思いがけなく、」安息田
を覚えて聖とせよ」との戒めが割り込んでき
ました。その時から、その意味など充分分か
らなくとも、安息田を覚えるようになり、い
じつか、自分でも、どことなく、人間らしい
まっとうな生き方をしているという自信が持
てるようになりました。

19世紀、日本を訪れた「フロンシスロ・サ
「エル」の旅行記が残されています。インド・
タイ・フィリピン・中国と東洋諸国を巡りな
がら、最後に日本に着いて驚いたのは、昼間
から酒を飲む者が一人もいないことに驚いた
ということです。じつじつと、勤勉で、礼儀正
しい庶民の生活振りを見て、東洋を巡り歩い
ても、こうした民族は日本人だけではないか、
東洋から、司祭・神父が出るとしたら、間違
いなく日本からだといえます。確かに、アジ
アの諸民族と比べると、日本人はどちらかと
言えば、生真面目で、勤勉であるといわれて
きました。

しかし、喜んでばかりはいられません。実
は深刻な病をかかえています。「安心して休め
ない」という病です。

「24時間働けますか」ということでもな
い「マーシャルが下で流れました。」「自転車
操業」「モーリッツ社員」「ワーク・ホリック」
(働き中毒)という言葉が生み出されました。
学生も、この点で例外ではありません。」「受験

戦争」という言葉があります。受験生のかか
えている一番の問題は、安心して休めないこ
うということです。それで、四六時中机にしがみ
付きます。良くないと分かっていても、自分で
は止めることも、休むこともできません。理
屈ではないのです。。

詩編46編10節には、「汝ら静まりて、わ
れの神たるを知れ」との御言があります。周
囲の山が震え動き、大水がザワザワと鳴りと
なるなか、「汝ら知れ」と言われています。
「知れ」とは、「生ける神のおられること」目
覚めよ」でもあります。

主イエスもまた、ガリラヤ湖で、荒れ狂う風
と荒立つ海に向って「黙れ、静まれ」と大声
で叫ばれました。すると「風はやんで、大な
ぎになりました」。それから、弟子たちをお叱
りになり、「なぜ、そんなにこわがるのか。ど
うして信仰がないのか」とおっしゃいました。

人間はどうも、こうして天からの大きな声
で「知れ」「静まれ」「休め」と言われてい
ないと、いえ、天のお父さまから怒鳴られな
いと、静まることも、休むこともできないの
ではないかと思われませぬ。

心が騒いで、静まらない時、わたしの面前に
主が立ちほだから、両手を広げて、「ストップ」
と命じられ、あるいは、天上から、権威ある
大きな声で、「静まれ」「休め」と声をかけて
くださらないと、安心して休むことの出来な
い不確かな存在ではないかと思われませぬ。

ガミガミと、頭越しに言われれば、うわしへ

ありません。それならば、黙って静かにさ
されれば分かるというのでしょつか。

しかし、どうも、この善し悪しを判別し
るほど、十分自らをわきまえているとはい
えない「アダムの子」なるわたしたちです。
ガミガミであれ、クドクドであれ、時には
怒鳴られないと駄目になってしまふ、不確
かな存在であることを自覚する必要があります。

(3)

改めて日曜日とは、如何なる日なのでしょ
つか。一週間「一回、こうして、わたし
の前を、主イエスが静かに横切られる日であ
ります。そして、日常のあわただしい六日間
の生活を断ち切られる日であります。そして
安息日を聖とされます。すると、どうして
う、いつしか、慢性的疲労・慢性的不眠症・
出勤拒否症などという、自分ではどうにも
ならない心身の不調も、さらには不摂生な生
活も、いえ、時間の奴隷・仕事の奴隷から
守られていることに気づきはじめます。

日本人は、本来の意味で、「休む」というこ
とを知らないのかもしれない。安心して休
めないのです。どうしてでしょう。勤勉に
働くことは知っています。しかし、休息の哲
学なるものがあるとすれば、それが日本には
まだ定着していないようです。日本軍隊の「月
月火水木金金」という習慣から依然として自
由とされています。

しかし、そうした、わたしたちのなかに、
日曜日の主人はあなたではない、天地を創

造し、あなたをお造りになったお方ではない
か、そう気づいた時から、時の流れが変
わりました。六日懲罰に働いて、安息日をこ
るというリズムカルな習慣が身につきはじめ、
生活全体の歯車が不思議なほどリズムカルに
なり始めていることに気づきました。

最後にもう一度、ルカ6章に目を留めます。
安息日に、弟子たちは空腹を覚えて、麦畑の
穂をつまみ、食べたことが、パリサイ人から
非難されました。しかし、これは何も、他人
の畑の麦をつまみ食いたことが問題とされ
ているわけではありません。問題は、安息日に、
「麦の穂を摘む」こと、それがほんの二掴み
か、三掴みであっても、「麦を刈ったことに
当る」——、とパリサイ人は非難したので
す。なんとこのへ理屈かと思えます。しかし、
パリサイ人たちは、そこまで、安息日規定を
こまかく解釈していました。

しかし、主イエスから、「あなたがたは、ぶよ
はこじて除く、しかし、らくだは飲み込んで
います」(マタイ23:24)との注意がパリ
サイ人たちに向けられました。

当時、パリサイ人たちのなかの、「シャンマイ
派」という派は、安息日に病人を見舞うこと
すら禁じていました。ですから、安息日に病
人をいやすなど、もっての他であると非難し
たのです。

それに対して、主イエスは、「安息日は人のた
めにあるので、人が安息日のためにあるので
はありません」(マルコ2:27)と「反論な

いました。

安息日に、「すへきじつ、ひ、ひ」ことはならないこと、「ととの画面があるひつひつです。」ことはならない「のは、六日の間なしてきたことをしてはならないのです。」なすべきこと「は、」安息日に神を礼拝し、隣人を愛することにあります。

礼拝において、御言をいただきます。その日の午後は、その聞いた御言を実践する時といわれてきました。日頃ご無沙汰している両親や子供に目を向ける。疎遠になっている人に手紙を書く。電話をする。病者を訪問する。働くことに懸命なあまり、見失っていた「隣人」を見つめ直す時が「安息日」でもあります。

永遠の安息を願いながら、後で新聖歌4771番を讚美します。

【共に祈ります】

天の父よ、安息日の真の意味を、いま一度見直すことができますように。あなたが定めてくださった日です。「安息日を聖とする」ことに、大切な意味がこめられていることに気づかせてください。主イエス・キリストの名にゆかり祈ります。「アーメン」。